



## 景行天皇と浮羽

生涯学習課文化財保護係 ☎75-3343

突然ですが皆さん、今私たちが生活しているうきはの地にはどのような由来があるかご存じでしょうか？山辺には柿畑が多く作られ、耳納連山扇状地北側には肥沃な穀倉地帯が展開しているうきはの地には、縄文時代から集落が形成され多くの人々が生活していました。筑後川流域には日本を代表する装飾古墳が複数築かれ、この地に残された遺跡からいかに重要な土地であったか見て取れます。

今回の耳納風土記では「景行天皇と浮羽」と題し、浮羽の由来について見ていきましょう。私たちにとって「浮羽」の音の響きはなじみのあるもので今や当たり前のことと思います。しかし、その由来は古く古代までさかのぼり、「浮羽」の地名が初めて登場するのは天武天皇の命により編修された『日本書紀』です。

「八月に、<sup>はづき</sup>的<sup>いくはのむら</sup>邑<sup>いた</sup>に到<sup>みをし</sup>りて進<sup>こ</sup>食<sup>かしはらで</sup>す。是<sup>うき</sup>の<sup>わす</sup>日<sup>かれ</sup>に、膳<sup>とき</sup>夫<sup>のひと</sup>等<sup>そ</sup>、盞<sup>うき</sup>を<sup>うき</sup>遺<sup>い</sup>る。故<sup>むかしつくし</sup>、時<sup>ひと</sup>人<sup>うき</sup>、某<sup>なづ</sup>の盞<sup>うきは</sup>を<sup>い</sup>忘れ<sup>い</sup>し處<sup>い</sup>に號<sup>い</sup>けて浮<sup>い</sup>羽<sup>い</sup>と<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>ふ。今<sup>い</sup>的<sup>い</sup>と<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>ふは訛<sup>い</sup>れる<sup>い</sup>なり。昔<sup>い</sup>筑<sup>い</sup>紫<sup>い</sup>の俗<sup>い</sup>、盞<sup>い</sup>を<sup>い</sup>號<sup>い</sup>けて浮<sup>い</sup>羽<sup>い</sup>と<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>ひき。」

4世紀前半頃、第十二代天皇である景行天皇が九州南部の熊襲を平定された帰り、筑後地方を巡幸した際にこの浮羽の土地を訪れた時のことです。炊事係が杯を忘れたために「惜しきかも、朕が酒盞はや」と嘆いたことで、この地に浮羽という名前がつけられました。酒盞とは杯のことを指しますが、もともと筑紫の人々は杯のことをうきはと呼んでいたという話もあります。



景行天皇がお座りになったとされる御座石（浮羽島）

熊襲を征伐するために九州の各地を巡幸した景行天皇は浮羽以外にも多くの地を訪れています。

福岡県南部地域に数カ月間滞在したようで、浮羽を訪れていたのもこの時期だとされており、周辺の高女市や大分県日田市にも浮羽と同じような地名由来説が残っています。

『日本書紀』の他には『豊後国風土記』、『肥前国風土記』、『筑後国風土記逸文』の中にも同じような内容での記載があります。このように4つの古代文献に浮羽の名前が記載されていることは注目すべき点で、前述した考古学的遺跡・遺物からも中央政権にとって大切な地域であったことが明白に分かります。そしてこの地を統率していた人物とされているのが的臣です。建内宿禰の子で葛城長江曾都昆古の子孫とされている的臣は武事をもって中央政権に仕え、射術に優れていたことなど『日本書紀』に複数の記述がみられる人物です。「浮羽」の由来については複数説があり、この的臣が訛って浮羽となった話も残っています。次回の耳納風土記ではこの的臣について詳しく見ていきましょう。

### 西ノ城古墳現地説明会を開催します

西ノ城古墳は令和2年に新しく発見され、特異な形状をした初期古墳として注目を集めています。今後も発掘調査が続く西ノ城古墳ですが、今年度までの調査成果を公表する現地説明会を2日間開催します。参加には申し込みが必要です。詳しくはうきは市ホームページをご覧ください。

●日時 2月25日(土)・26日(日)

●集合場所 うきは市民ホール前駐車場  
※現地まではバスで送迎致します。

